

なな山だより

なな山緑地の会会報 第16号 2009・7

山の人と谷の人

相田幸一

山(ここでは里山・雑木林)の活動には、町のくらしからは計り知れない何かがある。多様な生き物相手の行動であるから、当然だといえばその通りであろう。何年かにわたり、山での作業を続けていると、山での流儀とも言うべきものが何気なく身についてくるのだ。町で暮らしている人が山に入る時は、山の人や山作業経験者からある程度の山のしきたりや手順を伝えられる。

山に入ると、体と感性とで実感するのだが、日常とはかなり離れた不思議な感覚に包まれる。それが何かは、しばらくの間は分からない。植物の芽生え、開花、結実、落葉は毎年の繰り返しだが、その都度、新鮮な感動を呼ぶ。

小鳥のさえずりや草木の実など、餌を啄ばむ姿は可愛らしく心を和ませる。



昆虫たちの姿、動きにも興味は尽きない。

タヌキ、ウサギ、ネズミなど小獣たちの痕跡が見つければ、更に期待は増すばかりだ。

山を生き生きした姿に導いて、未来にこの自然を引き継ぐために私たちのささやかな活動がある。

しかし、そんな大義名

分は人間の思い上がり、方便に過ぎないと思えることもしばしばある。そんなこととは何か違うものが山の活動にはあるのかもしれない。

山に入ると、いままで塞いでいた気持ちがすーっと薄らぐことに気がつく。小さい草花がことのほか可憐で美しく感じられる。大木に出合えばその存在感に畏敬の念にうたれる。小鳥や昆虫に出会うと、森の仲間のように思う。そして、草を刈り、木を切り、土と触れ合う時、まさに大地の香りを全身に浴びているようで、俗世間のことから大きく隔たった自分をそこに発見したような気分になる。この感覚はどこから来るのか不思議な気がする。そこで、このように考えてみた。

私たちは山に入ったその時から、山の生き物たちと対等の立場にある。山の生き物はどの種、どの仲間もそれぞれに山での役割をもって、そこに存在し、生活している。私たちもその内のいくつかの役割を担っているのだ。その辺りを意識できると、その存在価値がおぼろげながら見えてくるような気がする。

そう考えてくると、いま私たちの山での行動は、かなり「いい線いっている」と思う。みな、山の人となって、ひとりひとり自分の役割を自覚して行動しつつも、お互いが協力しあって活動しているからだ。

ひとの暮らし方は“山の人”と“谷の人”に大きく分けできるとされている。漢字で山の方は「仙人」、谷の方は「俗人」と書く。今、私たちは、人としての生き方に目覚め、自然と対等に存在する“山の人”になることが求められているのではないだろうか。

ここで私の尊敬する、心の師でもある哲学者、内山 節の言葉を引用しておこう。

小さな村には、大都市で考える効率性の論理では計り知れない何かがある。それは、自然とともに生活し、一人一人がみんなの役に立つ人間として役割を果たしながら暮らしていることだ。絶えない変化が都市のエネルギーだとすれば、農山村の魅力はゆっくりしか変わらないことによって「持続可能な社会」をつくっていくことにある。

写真 = 初夏のなな山

広げよう会員の和

リレー随筆(16)

懐かしさの中で...

立見 久子

私は、今参加させていただいている「なな山」のような通称「山」(皆がそう呼んでいた)のそばで生まれ育ちました。春にはキンラン、ギンランを見つけ、夏にはヤマユリを手折り、虫やドジョウは素手でつかみ、また、ホタルをとって来て蚊帳の中に放して遊びました。秋から冬には、スギの枯葉を集めて毎朝、近所のひとに焚いてもらい暖まってから、自転車で学校に通っていました。



多摩ニュータウンの造成工事が始まり、地響きと共にブルドーザーが動き回り、木を切り倒し、山を削り、谷や田を埋めて行く。全ての緑は壊されてなくなり、大きな団地へと変わってしまい寂しい思いをしていました。後から植樹された緑は私にとっては違和感がありました。

多摩に戻って来た時、残された緑は、多摩市と日野市の市境周辺だけになっていました。その緑の山道を子供たちとよく散歩をしました。「お母さんはこんな所で育ったのよ」などと言いながら...

その山に帝京大学が建ち、山道は寸断されて散歩の途中で帝京大学の通学路にぶつかってしまうこともありました。子供たちが大きくなると、その山道も遠くで見ているだけで中に入ることもなくなっていました。

ある日、近所の方から、なな山緑地の話を聞きました。「キンラン、ギンラン、ヤマユリ、その他いろいろな花や木が沢山あるらしいよ」と。ぜひ参加したいと、相田さんを通して入会を申し込みました。なんと！それは、唯一残された日野と多摩の市境の中にあつたのです。なな山緑地のすぐ脇の道路をよく通っていたのですが、この中で活動されていることにはその時まで気がつきませんでした。

最初の日、案内されて足を踏み込むと、何とも気持ちの良い空間で、昔の懐かしさがいっぺんによみがえり、思わず、「なつかしいー」と声に出していました。父や兄弟と一緒に歩き回った昔のあの「山」に再会できたのです。この空間に身を置く心地よさを知り、次回もまた来たいとやみつきになりました。ここに参加されている方々も皆同じ思いなんだろうな？と勝手にそう思っています。

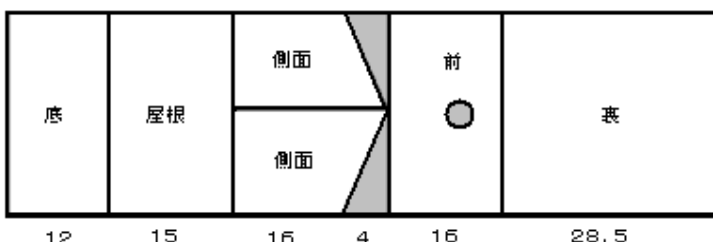
なな山に来るためなら仕事を休んでもいいかなと思うほどです(ちょっとオーバーかな?)。

これからも、時間と体調が許すかぎり参加させていただきたいと思っています。

さて、次は、新人ながら毎回がんばって活動しておられる出口さんをお願いします。どうぞよろしく。

バードウィークに巣箱をつくりました

5月10日の活動日は16日までのバードウィーク(愛鳥週間)のスタートの日でしたので、なな山でも巣箱づくりをしました。用意するものは、 $91.5 \times 21.5 \times 1.5$ cmの板、金ツチ、キリ、プラスドライバー、ノコギリ、木工ドリル、定規、鉛筆、クギ、木ねじ、50cm位の紐。板に下図のように線を引き、鳥の入る穴をドリルで空けます(シジュウカラ用でしたら、直径2.8~3cm)。後は各パーツをノコギリで切り離します。それをクギ、木ねじで組み立てれば完成です。箱の上下に穴を空け、紐を通して木に取り付けます。なな山のコナラに取り付けましたが、これはあくまでテストで、この時期はすでに繁殖期に入っており、鳥は巣には入りません。秋になったら掛けなおします。



ドクダミ ドクダミ科

Houttuynia cordata Thunb.

6月になるとなな山の中の谷奥一帯にドクダミが群生する。ここは湿り気の多い明るい日陰のため、ドクダミの繁殖には最適である。

ドクダミは西ヒマラヤから中国を経て日本に分布する。花は花弁やガクに当たる花被片がない。白く花弁に見える4枚は総苞と呼ばれるもので、花はその上方に雌しべと雄しべだけがむき出しの状態ですくき出している。ドクダミは受精することなく、種子を作る単為生殖をする植物といわれている。

総苞をもつ植物にはハナミズキやヤマボウシ、ハンカチノキがある。また総苞はないがドクダミによく似た植物にハンゲショウがある。

ドクダミはその匂いから嫌われ者にされることが多いが、中国では古くから日常の食用とされてきた。日本ではこのところ見直され、葉をてんぷらやお茶にしているが、昔からその薬効により別名「十薬(じゅうやく)」といわれ、高血圧や動脈硬化の予防薬として、また外傷薬として使われてきた。

5, 6年も前から私はこの季節にドクダミ化粧水を作り、1年中使っている。作り方は人により千差万別のようにだが、まず咲き始めのドクダミを根元から刈って、きれいに水洗いし、日陰干しにする。よく乾燥したら、広口瓶にぎゅうぎゅうにつめて、純米焼酎を瓶いっぱいに入れる。そのままふた月くらい置くと、深い琥珀色になるので、ドクダミを取り出しグリセリンを適当(ドクダミ焼酎5に対しグリセリン1くらい)に混ぜて出来上がり。



グリセリンを入れないで使う人もいるが、グリセリンを入れると保湿感がでるようだ。匂いは多少残っているが気になるほどではない。小さな瓶に小分けして、手や顔、どこにでもつける。また、ドクダミを刈るときは余分に刈っておき、乾燥させ布袋に入れて、お風呂に入れる。汗がとまらないくらいによく温まる。

イギリスではドクダミの旺盛な繁殖ぶりから、園芸植物に変身し、斑入りのゴシキドクダミが「カメレオン」という名前で紹介され、観賞用やグランドカバーとして使われている。

(写真) = 1. ドクダミ。(上右)

2. ハンカチノキ(上左)

3. ゴシキドクダミ「カメレオン」(中左)

4. ヤエドクダミ(中右)

5. 日陰干ししているドクダミ(下左)

6. よく乾燥したドクダミ(下左中)

7. 純米焼酎(下右中)

8. 広口瓶につめ、焼酎を入れる(下右)



2009・4・12(日)晴れ 気温21

新年度初の活動 クヌギの植樹、新エリアの境界確認。参加者20人。
「作業」畑=サトイモの植え付け。新エリア=境界を確認し、トラロープを張った(写真右)。中の山=クヌギ苗30本を植えて記念の杭も打った。広場=樹の下のテーブルと椅子にカンナ掛け。
「観察」見つけた植物=タブノキ、クマシデ、ミツバアケビ、ホウチャクソウ。



2009・4・26(日)晴れ 気温22

昨日の雨がウソのような快晴、FM 多摩が取材に来る。参加者17人。
「作業」畑=サツマイモ植え付けの準備。広場=草刈り。倉庫=備品棚卸しと整理。中の山=道づくり、倒木の整理。FM 多摩が取材に来て会長他会員2人に話しを聞く。当会の活動を紹介してくれた。(写真左)



「観察」見つけた植物=キンラン、ササバギンラン、エビネ、アオハダ、コウゾ。見つけた鳥=アオゲラ、ガビチョウ。

2009・5・10(日)晴れ 気温29

真夏日! サトイモ、カボチャ植え付け。巣箱を作る。参加者20人。
「作業」畑=サツマイモ植え(写真右)、カボチャ植え。中の谷=道の修理。法面=カヤ刈り。西斜面=笹刈り。広場=巣箱づくり。グリーンボランティア8期生が実習で参加
 住崎さんの畑の農業ボランティア2名が畑と雑木林の関係を現地見学するために参加。
「観察」見つけた植物=マルバウツギ、ナワシロイチゴ、ニセアカシア、ワニグチソウ、ノイバラ、スイカズラ、アマドコロ。



2009・6・14(日)晴れ時々曇り 気温25

広場の草刈り、畑の草取り、ですっきり。参加者17人。
「作業」畑=カボチャのつるの下にカヤを敷く、雑草を取る。
 広場=草刈り。道路沿い=草刈り、クワの木1本伐倒。

2009・6・28(日)曇りのち雨 気温23

ジャガイモ掘り、掘りたてをジャガバターで試食。参加者19人
「作業」畑=ジャガイモ収穫、サトイモ土寄せ・施肥、サツマイモつる返し。広場=草刈り、クヌギの苗植えなおし。中の谷=入り口付近の雑草刈払い、シタケ・ナメコのホダ木の本伏せの材を取るためヒノキ1本伐採した時、雨が激しくなり残念ながら作業を中止した。



昼にジャガイモを茹でて試食、塩とバターを付けると美味!
 住崎さんの畑の農業ボランティア最年少の野田君(高2)が実習に来てクヌギの苗を植えてくれた。将来が期待される若者。
 5月10日に作った巣箱を木に取り付けてみた。小鳥が巣づくりをするのは来年の春、秋になったら本式に掛けなおす予定。
「観察」見つけた植物=ヒメヒオウギズイセン、エゴノキの実、ヒヨドリバナ、ヒメドコロ、オカトラノオ。見つけた蝶=ムラサキシジミ(写真右)羽の中心が青紫色に輝く美しい蝶。

なな山だより 第16号
 発行
 発行責任者
 住所
 ホームページ
 編集委員

2009年7月12日発行
 なな山緑地の会
 高木直樹
 多摩市和田 1394 13
<http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/>
 鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

編集後記

梅雨時は、活動日の天気が心配ですが、今年は5月第2週が朝から雨で中止になった他は何とか活動できている状況です。皆のやる気がお天道様まで頑張らしてるのでしょうか? これからの暑さも皆で乗り切っていきましょう K